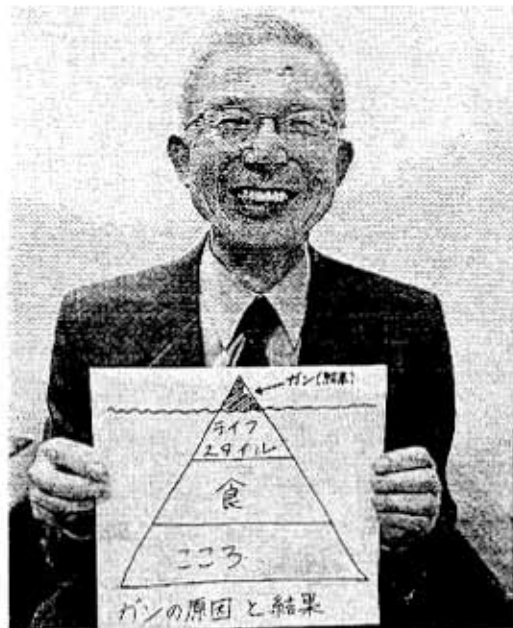


## 末期がんから復活できた理由は



ささき・ひでお 1939年、宮城県出身。42年間勤務した仙台銀行を退職後、末期がんと告知されたが、食事、生活スタイル、心の在り方を変えることで1年でがんとを自然退縮させた。

日本人の2人に1人ががんになるという時代。がんを告知されたら、手術、抗がん剤、放射線という三大療法を受ける人が大半だが、その一方で生活習慣、食、心の在り方を変え、自己免疫力を高めることで自然治癒に成功した人たちもいる。がんを治し、がんになる前よりもさらに、心身ともに健康になることを目指し啓発活動を展開するNPO法人「ガンの患者学研究所」(横浜市)に集うがん患者らの会「いのちの田圃の会」の佐々木英雄会長に聞いた。

(佐藤弘)

がんになり向かう「いのちの田圃の会」 佐々木 英雄さん

「がんとかかわりは。」

「2007年4月、大病院で前立腺がんと診断された。リンパには転移していないが骨転移がある末期がんで、三大治療はできないと言われた。告知を受け、がんは死という思いが頭をよぎり、谷底に突き落とされたような大きなショックを受けた」

「手術も何もできないなら、免疫力を上げ、自然治癒力でがんに向かってみよう」と決めた。かつて本に目を通して記憶にあった『体を温め、免疫を高めれば病気は治る』という新潟大学の安保徹教授の言葉を信じ、食事は動物性タンパク質を避けて、玄米菜食を



徹底。地域の世話役や孫の世話など、退職後も続けたきた新聞を読む暇もないような忙しい生活を改めた。それでも一人では心細かったらう。

「その年の9月、神奈川県で開かれるガンの患者学研究所主催の講演会に、がんを克服した「治ったさん」らが集まることをチラシで知り、出かけてみた。がん

になったのには原因があるはず。それを取り除かないまま、対症療法を行っても再発・転移の心配はつきまとう。そんな考え方の下、がんに挑む仲間たちの姿に感動。自分も治る、治せるんだという心のスイッチがオンになった」

「それから生来の完璧主義を改め、体に優しい手当て、玄米菜食、ウオーキングや俳句などゆったりとした心で、楽しく暮らすよう心掛けたら、がん告知から1年後、画像診断でがんが消えていた」

「医者もさぞかし、驚いたことだらう。」

「現代医療を否定するわけではないが、医者に言わ

## 生き方変え、免疫力上がった

れるまま三大治療を施した結果、副作用で正常な細胞まで目ざれることがあるのも事実。私たちの主張は現代医学では異端扱いされることが多いが、余命宣告をされながらも、患者会には私のような「治ったさん」が現実には300人以上いる。「いのちの田圃の会」も、治る道は決して一つではないという主張にも説得力はあると思う」

「今後、どんな行動を。」  
「今、がんになる人があまりにも多すぎる。そこで今月29日、がんの原因や、その治し方について書いた小冊子『すべては、あなたが治るため』(無料)を5千部、西日本地区11カ所で一斉配布する。福岡では私も街頭に立つ予定だ」

「年中無休のような仕事の仕方、ビタミン、ミネラル不足の食事、人間関係など、ストレスにあふれた現代の生活習慣ががんにつながる。そうしたことを私たちのキャンペーンによって、がんになった人だけではなく、がんになる前に気付いてもらえたらうれしい」

九州での小冊子配布は29日午前10時～11時、福岡市  
西日本新聞本社前▽長崎市▽JR長崎駅高架広場▽宮崎市▽宮崎山形屋本館前▽鹿児島市▽鹿児島中央駅東口1の4カ所。事務局  
・安倍さん045(062)7466(月～金曜日午前9時半～午後1時)。